

同性愛者のアイデンティティ研究における現象学的アプローチの可能性 ——本質主義／社会構築主義を越えて——

島袋 海理

1. 問題の所在——「本質主義対社会構築主義」の相対化

同性愛者のアイデンティティをいかに捉えるのかは、欧米の同性愛研究においてつねに議論の主題の一つとなってきた。初期の同性愛研究は、同性愛者を異性愛者との明確な境界をもったマイノリティ集団とみなす「エスニック・モデル」を採用してきた (Epstein 1987: 20-2)。しかし 1980 年代にエイズ危機が到来すると、ポスト構造主義に触発された研究者は、既存の同性愛者像を脱し、アイデンティティの被構築性を理論化するようになる (Edelman 1994=1997; Butler [1991]1993=1996)。こうした試みは、「同性愛／異性愛」の二項対立の徹底的懐疑とアイデンティティの流動性への着目を特徴とするクィア理論の源流となった。

アイデンティティの被構築性という視点は同性愛の歴史研究にも影響を与える。歴史学においては、同性愛があらゆる時代や文化に広範にみられると主張する本質主義者と、同性愛が特定の時代や文化・言語において構築されてきたとする社会構築主義者の見解が対立してきた (Halwani 1998)。この対立は「本質主義対社会構築主義」論争を引き起こし、セクシュアリティをアイデンティティの中核に据える時代以前に“同性愛者”カテゴリーを適用することに関して、議論が重ねられてきた (魚住 2011)。このように、同性愛者のアイデンティティ研究の動向は、本質主義と社会構築主義の対立の歴史として整理される。

ただし、「本質主義対社会構築主義」の構図には検討の余地があることが指摘されている。Halwani (2006: 209) によれば、本質主義と社会構築主義の対立はいまだ「どの立場も明白な勝者にはなっていない」。両者の対立が行き詰まりをみせていることを踏まえ Halwani は、本質主義者と社会構築主義者の立論を詳細に検討し両者の主張を対立関係から解放すれば、同性愛者のアイデンティティに関する議論はさらに発展すると示唆する (Halwani 2006: 222-3)。社会構築主義を標榜する者が論敵を“本質主義者”と一方的に呼ぶことで「本質主義対社会構築主義」論争は成立していたという指摘 (Boswell 1992: 133) もあり、本質主義と社会構築主義の対立関係は疑似的なものである可能性がある。同性愛者のアイデンティティ研究を「本質主義対社会構築主義」の隘路に陥ることなく読み解くことが、現在の同性愛研究においては求められている。

こうした問題設定を踏まえたとき、日本において同性愛者のアイデンティティ研究の動向を整理することには一定の意義がある。なぜなら、欧米と日本とでは同性愛者をめぐって歴史や社会的状況が異なるため、研究者たちのあいだでは日本独自の問題背景に応じて議論することが目指されてきたからである (風間 1997: 32; ヴィンセントほか 1997: 150-4)。

川坂和義が的確に指摘するように、日本のゲイ・スタディーズは「同性愛者が主体的に自分の問題を語ることによる日本におけるゲイのアイデンティティ構築」（川坂 2021: 128）を目指した当事者研究の側面を有していた。こうした事情に鑑みれば、日本における同性愛者のアイデンティティをめぐる議論は、欧米における議論とは異なる次元で展開されてきたといえる。日本における同性愛研究の展開を仔細に検討することで、本質主義と社会構築主義を相対するものとする見方を乗り越えることが期待できる。

しかし、同性愛者のアイデンティティ研究の展開を総合的に把握する試みは、管見の限りほとんどない。日本の同性愛研究をめぐっては、カミングアウト研究（川坂 2008; 大坪 2019）やゲイ・スタディーズ（川坂 2021）の動向は整理されている一方、アイデンティティ研究の動向は十分に整理されていない。日本の同性愛研究者は、欧米における本質主義理論や社会構築主義理論をどのように受容してきたのか。またゲイ・スタディーズの後続研究は、アイデンティティをどのように理論化してきたのか。同性愛研究者はアイデンティティの何を争点としてきたのか。本質主義／社会構築主義の隘路に陥ることなく研究動向を把握するためには、これらの問いにもとづき同性愛研究を整理する必要がある。

そこで本稿は、日本における同性愛者のアイデンティティ研究の動向を整理し、アイデンティティ研究の日本的展開の様相を明らかにする。この研究目的を達成する作業（研究動向の整理）は2節で行われ、3節では、2節の作業により導き出される当該研究領域の課題を指摘する。そして本稿は、その課題を乗り越えるには、理論と方法の連続した枠組みをもつ現象学的アプローチが有効であることを明らかにする。これが本稿の第二の目的であり、現象学的アプローチの詳細は、4節で理論、5節で方法の順に説明する。

2. 同性愛者のアイデンティティ研究の日本的展開

本節では、日本において同性愛者のアイデンティティがいかに検討されてきたのかを、同性愛研究のレビューにより検討する。同性愛者のアイデンティティを日本の学術領域で本格的に取り扱いはじめたのは、ゲイ当事者によって担われたゲイ・スタディーズである（川坂 2021）。本節はゲイ・スタディーズの議論からレビューを開始し、日本における同性愛者のアイデンティティ研究の変遷を整理する。

(1) ゲイ・スタディーズ—同性愛カテゴリーのポリティクス

ゲイ・スタディーズのアイデンティティ理論は本質主義的だと形容されることが多い。原因の一つは、性的指向概念にある。これは *sexual orientation* の訳語であり、1991年から展開されたいわゆる「府中青年の家裁判」¹のなかで「性的指向」という訳が提起された。ゲイ・スタディーズの論者でこの裁判の原告でもあった風間孝は、異性愛と同性愛との同等性を

¹ 動くゲイとレズビアンのが東京都により府中青年の家の利用を拒否されたことをめぐって展開された裁判。詳細は風間・河口（2010）参照。

強調するために「性的指向」という表現を用いたと説明する(風間 1999: 16)。さらに orientation が「志向」や「嗜好」と訳された場合、同性愛が私的領域に留められてしまうという問題意識(ヴィンセントほか 1997: 210-1)のもと「指向」が選定され、「本人の意志では選択や転換ができない」という本質的な意味のもと、性的指向概念は定式化された²。

このように本質主義的なセクシュアリティ観を採用したゲイ・スタディーズの論者だが、本質主義理論か社会構築主義理論のいずれかに与することは拒否してきた。実際、日本文学研究者のキース・ヴィンセント、社会学者の風間と河口和也によって書かれた『ゲイ・スタディーズ』(ヴィンセントほか 1997)は、欧米の同性愛研究における本質主義と構成主義の対立を紹介するも、日本におけるゲイ・スタディーズはホモフォビアを乗り越えるための独自の理論化を行うと宣言する。

私たちにとっての「今日の問い」は、いかにホモフォビアと闘うかということである。いかなる理論的立場を取るか、いかなる学派に属するか、それは本質主義か、構成主義か、等々というのは二次的な問いに過ぎないのである。(ヴィンセントほか 1997: 154)

日本のゲイ・スタディーズの論者は、社会のホモフォビアを乗り越えるという目的を達成するための理論化を目指していた。実際、フーコーの理論を、「抵抗の理論」として議論に組み込む試みもあり(河口 1997; 風間 2002)、ゲイ・スタディーズは社会構築主義理論も柔軟に取り入れた理論化を行ってきた。

ただし同性愛カテゴリーの解体については、慎重な姿勢がみられる。先に示した『ゲイ・スタディーズ』は、集合的アイデンティティとしてのカテゴリーが個々人の差異を抹消することに言及しつつも、「世の中が異性愛主義に支配されている限り、そのカテゴリーを捨て去ることはできない。否、できないのではなく、捨てるはいけないのである。そうしてしまうと異性愛主義が絶対化するだけなのだから」(ヴィンセントほか 1997: 160)と指摘する。ここでは、異性愛主義の解体をカテゴリーをめぐる課題の解消に優先させる立場から、異性愛のヘゲモニー批判としての潜勢力を同性愛カテゴリーに見出している。ゲイ・スタディーズの論者は同性愛カテゴリーを、異性愛主義やホモフォビアを乗り越える方途として重視していた。

同性愛カテゴリーの政治性を追求するゲイ・スタディーズが目指したのは、カミングアウト行為である。同性愛者のカミングアウトは「ゲイの主体そのものの社会的で政治的な形成の始まり」(ヴィンセントほか 1997: 95)とみなされ、政治的実践としての側面が強調されてきた。風間も、府中青年の家裁判などを事例に挙げながら、カミングアウトは「権力関係の中で構築されたアイデンティティを用いながら、公/私の区別が同性愛をそのいずれ

² 本質主義的な意味づけがなされた性的指向概念が、セクシュアル・マイノリティ当事者にはいかに受容されたのかについては、武内(2022)参照。

からも排除することに対して疑問を付していく抵抗の行為」(風間 2002: 361-2) であると喝破する。ゲイ・スタディーズはアイデンティティの被構築性を踏まえつつも、ホモフォビアを揺るがす契機として同性愛カテゴリーのポリティクスに着目した。

(2) レズビアン・スタディーズ—アイデンティティ・ポリティクスの擁護

同性愛カテゴリーの政治的効果は、レズビアン・スタディーズにおいても検討されてきた。飯野由里子は『レズビアンである〈わたしたち〉のストーリー』(飯野 2008) において、1970年代後半以降の日本のレズビアン・アクティヴィズムの言説を分析する。飯野は社会構築主義者がアイデンティティ・ポリティクスに向けた批判に言及しつつも、日本のレズビアン・アクティヴィズムの歴史を辿りながら、『同性愛』や『レズビアン』といったカテゴリーを用いて〈わたしたち〉という集合性を可能にしようとしたストーリー実践」(飯野 2008: 25) に対して肯定的な立場を取ると宣言する。高橋慎一が同書の書評で端的に言い表したように、飯野の議論は「アイデンティティを基盤とする政治を擁護する」(高橋 2008: 193) 研究として評価された。

堀江有里は、アイデンティティ・ポリティクスに関する議論をさらに推し進めた。堀江は、カテゴリーがアイデンティティの固定化を招くという欧米における議論を紹介するも、カテゴリーを通じて同性愛者の「集合行動が培われてきた欧米(とくに北米)と、この日本では、状況はあまりにも異なる」(堀江 2008: 158) と分析する。この問題意識のもと堀江は「差別構造を追求する手法を、ひとまずは選んでみるべきなのではないだろうか」と主張し、「わたしは『レズビアン』にこだわりたい」と指摘する(堀江 2008: 158)。

同性愛差別に抵抗する手法としての「レズビアン」という課題設定は、『レズビアン・アイデンティティーズ』(堀江 2015) に引き継がれる。堀江はアイデンティティの差異や多様性を排除することのない暫定的な抵抗の場として、単数形の「アイデンティティ」ではなく複数形の「アイデンティティーズ」を提唱する。

多様な〈生〉をもつ複数のレズビアン(たち)が、暫定的に〈レズビアン・アイデンティティーズ〉を引き受け、それを表明していくなかで、何者かに〈なる〉こと。境界を越境していくこと。そして、個別の〈アイデンティティ〉自体を問い直して作りかえたり、ほかの〈アイデンティティ〉を招き入れたりしていくこと。そうした作業をとおしてしか、レズビアン(たち)の不可視性や抹消への抵抗は存在しえないのではないだろうか。[……]〈レズビアン・アイデンティティーズ〉とは、そのような「批判力を備えた場」として把握することができる。(堀江 2015: 160-1)

堀江は、レズビアンが異性愛規範とセクシズムという二重の困難に直面してきたことを踏まえ、その困難への抵抗の契機として、レズビアン同士が連帯して同性愛差別に抵抗する「レズビアン・アイデンティティーズ」を構想した。このようにレズビアン・スタディーズ

は、アイデンティティの多様性を前提としつつも、レズビアン同士の連帯による抵抗の可能性を手放さず、アイデンティティ・ポリティクスの政治的効果を追求してきた。

(3) セクシュアリティ研究——「同性愛／異性愛」構造の攪乱

同性愛カテゴリーやアイデンティティ・ポリティクスを擁護する議論にはしかし、批判も寄せられてきた。竹村和子は、「同性愛／異性愛」の構図にもとづく連帯を志向する同性愛解放運動の戦略について、「性にまつわる多様な関係を、異性愛者と同性愛者という二つの固定したカテゴリーのなかに押し込めることこそ、近代がつくりだした幻想の二元論ではないか」(竹村[2002]2021: 94)と指摘し、「同性愛者というカテゴリーの主張は、けっして解放言説の最終的な目標とすべきではない」(竹村[2002]2021: 45 強調原文)と主張する。竹村は異性愛／同性愛の序列構造とジェンダー規範を生み出すメカニズムを「[ヘテロ]セクシズム」と呼び、同性愛カテゴリーを前提とする解放言説を批判する。

ゲイ・スタディーズの論者が注目してきた性的指向概念についても、批判が展開されてきた。例えば石井香里は、性的指向を「生得的なもので本人にはどうすることもできない制御不可能なものと考え、自分はそうではないと感じているレズビアンを排除することにもつながる」(石井 2009: 78)と指摘する。また伊野真一は、日本のゲイ・スタディーズの論者の言説を直接の批判の対象としている。先述した通りゲイ・スタディーズの論者はセクシュアリティの選択不可能性を強調するため *sexual orientation* を「性的指向」と訳したが、このことに対し伊野は、「本来的には、『嗜好』『志向』であったとしても差別されていいわけでもない」(伊野 2005: 49)にもかかわらず、「『性的指向』か、『性的志向』『性的嗜好』かという二者択一の問いに答えることを要求することこそが差別の論理であり、その問いに答えようとする者が、差別の共犯者となる」(伊野 2005: 52 強調引用者)と批判する³。

セクシュアリティ研究者が同性愛カテゴリーや性的指向概念の援用を批判したのは、同性愛差別を成立させている構造を根本的に乗り越えようとしてきたからである。「同性愛／異性愛」や「選択可能性／選択不可能性」という二項対立にもとづいた議論をしている以上、二項対立を強いる根本の構造は温存される。こうした二項対立を産出する差別の構造、すなわち「差別の論理」(伊野 2005)あるいは「[ヘテロ]セクシズム」(竹村[2002]2021)を問題化すべきと考える竹村や伊野は、カテゴリーに依拠した解放言説やゲイ・スタディーズの議論を批判してきたといえる。

それでは、「差別の論理」や「[ヘテロ]セクシズム」はいかにして乗り越えられるのか。

³ こうした主張は、江原由美子の差別論を彷彿とさせる。江原によれば、「被差別者は『差別』という事実の前において同一であるだけであって、その状況において多様である」(江原[1985]2021: 130)。それにもかかわらず、差別の原因を差別者と被差別者のあいだに存在する「差異」にあるとみなし、「差異」が「差別」の原因であるかのように語る論理構成がある。江原はこれを「差別の論理」と呼び、差別の言説は「『差別の論理』が立てた問いをそのままにして、その答えの不当性にばかり議論を持っていってしまうため、その問いの立て方自体、問題設定自体の不当性に気づかなくさせられてしまう」(江原[1985]2021: 137 強調原文)と指摘する。この課題を乗り越えるためには、「差別の論理」を根源的に批判する反差別言説の構築が重要であると江原は主張する。

竹村は、カテゴリーと経験のずれからアイデンティティを脱構築していく道を提唱する。

わたしたちが社会構築されている存在であるかぎり、その構築のまったき外側に、わたしたちの位置を一現実としても、理念としても一定位することはできない。わたしたちにとって可能な道は、構築の過程で生み出される社会的カテゴリーと個別的な経験のあいだのずれに目を向けることであり、それによって、わたしたちのアイデンティティをアイデンティティの内部で脱構築していくこと〔……〕である。
(竹村[2001]2013: 30 強調原文)

セクシュアリティ研究者は、カテゴリーと個別的な経験のずれに規範攪乱の可能性を見出す。実際伊野は、同性愛者に対する調査からこのずれの感覚が表明されたことを踏まえ、「カテゴリーとの距離を操作しながら自己を語るができるエイジェンシー」(伊野 2005: 46) の政治的効果を主張する。さらに石井はレズビアン・パッシング実践の多様な例を分析し、パッシングを「カミングアウトの対極に位置する消極的な実践ではなく、ジェンダーに規定される異性愛と同性愛という二つのカテゴリーを往来する脱構築的な実践」(石井 2009: 76) として再定式化する。

このように、カテゴリーやアイデンティティを前提としてホモフォビアを乗り越えようとする議論を批判した論者は、同性愛者の抑圧や差別の根源にある「差別の論理」や「[ヘテロ]セクシズム」を解体するための方途を探ってきた。その際に重視されたのは、既存の支配的なカテゴリー理解やアイデンティティ理解を攪乱しうる個別的な経験や諸実践であった。

ここまで、日本における同性愛者のアイデンティティ理論の変遷を検討してきた。ゲイ・スタディーズやレズビアン・スタディーズは、具体的な差別問題やホモフォビアの抑圧を乗り越える方途としてアイデンティティに着目し、政治的アイデンティティの理論化を志向した(1項、2項)。対してセクシュアリティ研究は、具体的な差別事象やホモフォビアの根底にある異性愛規範を乗り越えるための諸実践について理論的に考察した(3項)。

本節が明らかにしたことは、日本における同性愛者のアイデンティティ研究は、欧米とは異なる様相を呈したことである。すなわち、同性愛者のアイデンティティの被構築性を前提としたうえで、何にホモフォビアや異性愛規範の解体を期待するかをめぐって議論が展開された。また、欧米の最先端の理論をただ導入するのではなく、社会構築主義者によって批判された同性愛カテゴリーやアイデンティティ・ポリティクスの意義を再検討し、そこに政治的効果を見出す議論がゲイ・スタディーズやレズビアン・スタディーズから提起された。

また本節は、「本質主義対社会構築主義」とは違う位相で、同性愛研究者間に見解の相違がみられることを示した。カミングアウト実践やアイデンティティ・ポリティクスの政治的効果を強調してきたゲイ・スタディーズやレズビアン・スタディーズに対し、セクシュアリティ研究はそうした見解とは別のところにある異性愛規範の攪乱可能性を考察してきた。

ただし、両立場はいずれも、異性愛規範やホモフォビアを乗り越えるのに資するアイデンティティや実践を追求するという共通の土台に立っていたといえる。本節は、政治的効果を持つ同性愛者のアイデンティティや実践を追求する試みの蓄積として、日本における同性愛者のアイデンティティ研究の動向を整理した。

3. 同性愛者のアイデンティティ研究の隘路

同性愛研究者がカミングアウトの政治的効果を称揚することについては、危険性も指摘されてきた。先に紹介した伊野(2005)はアイデンティティやカミングアウトへの支配的な理解に対し違和感やずれの感覚を語る同性愛者の存在を紹介しているが、「カミングアウトのモデルの政治的なマニフェストは、皮肉にも、アイデンティティを持つべしという規範を共有できない者に対してはドグマとして抑圧的にしか作用しない」(伊野 2005: 64)と指摘する。アイデンティティやカミングアウトに政治的効果を見出す議論が、それに違和感を覚える同性愛者の感覚を否定するものとして流通することを伊野は危惧しているといえる。

他方、アイデンティティの攪乱に政治性を見出す議論にも、同様の批判が向けられている。清水晶子は、流動的なアイデンティティを有するものの「社会生活上では絶え間なく男か女かの一貫したアイデンティティへの統合を迫られ続ける」マイノリティを例に出し、伊野(2005)らの議論が既存の『アイデンティティの主張』への安易な批判へと流用されることを、警戒しなくてはならない」と指摘する(清水 2006: 185)。清水は、研究者により政治的効果が期待される実践を称揚する議論が、そうした議論では説明できない当事者の困難を不可視化する根拠に転用されてしまうことを懸念しているといえる。このように、政治的効果が期待されるアイデンティティや実践を研究者が擁立する試みは、そうした試みでは説明できない同性愛者の問題を見落としてしまうという原理的な課題を内包している。

こうした指摘を踏まえたとき、政治的効果を持つアイデンティティや実践を研究者らが擁立するという、これまでの同性愛者のアイデンティティ研究とは異なるアプローチの研究が求められる。ゲイ・スタディーズやレズビアン・スタディーズは具体的な差別事象やホモフォビアを乗り越える方法としてアイデンティティの政治的有効性を強調してきたが、研究者によって措定されてきた政治的アイデンティティに先立つ、同性愛者個々人のアイデンティティ理解や個々人の経験は、十分に検討してこなかった。

セクシュアリティ研究も同様の課題を抱える。確かに伊野(2005)は同性愛者への調査を通じて個別的な語りを検討してきたものの、その語りの詳細が明かされることはなく、どのような人がカミングアウトへの支配的な理解に違和感を表明しているのか、またそうでない人はどのようにカミングアウトを理解しているのかについても分析されていない。多様なパッシング実践の例を紹介した石井(2009)然り、セクシュアリティ研究者は自身が着目する政治的実践の効果を保障する同性愛者個々人の経験のみを検討してきたのではなかろうか。言い換えれば、セクシュアリティ研究においては、同性愛者個々人の語りをみること

の意義が政治的効果を見出すことに切り縮められてきた。政治的に有効なアイデンティティや実践を打ち立てる試みが前述した原理的課題を内包する以上、政治的有効性主導で同性愛者個々人の経験や意識に迫るのではなく、同性愛者個々人の経験や意識それ自体を詳細に明らかにする研究が求められる⁴。

ここで参考になるのは、金田智之のカミングアウト研究である。金田は解放や抵抗の手段として研究者によって意味づけられてきたカミングアウト行為の意味を、同性愛者へのインタビュー調査にもとづいて詳細に検討する。その結果、自らのセクシュアリティが他者に“バレバレ”であると語る同性愛者や、自己のセクシュアリティを隠す必然性を感じていない当事者の語りから、解放や抵抗の手段に還元されない同性愛者のカミングアウト行為の意味を提示する。このカミングアウト理解を踏まえ金田は「いかなる場合にカミングアウトが行われるのか、ということは動的なものであり、ただ同性愛者を取り巻く環境における抑圧や権力へとその理由を回収することはできない」（金田 2003: 76）と指摘し、カミングアウト行為の意味を“個人の選択的行為”として再構成する。

金田（2003）を踏まえれば、アイデンティティの政治的効果を裏づける目的ではなく、研究者らによって構成されたアイデンティティ理解を再構成する目的で、同性愛者個々人の意識や経験を検討するという研究の方向が導出される。あるアイデンティティが政治性を有しているかどうかにかかわらず、個々の同性愛者は生活史的に規定されながらそれぞれアイデンティティを形成している。しかしこうした実態は、これまでの議論においては部分的にしか参照されてこなかった。そこで、金田（2003）がカミングアウトを事例として行なったように、研究者によって措定されたアイデンティティ理解を括弧入れし、政治的効果には還元されない同性愛者個々人の生きられた経験に焦点を当て、同性愛者個々人の意識にもとづいてアイデンティティ理解を再構成する研究を構想する必要がある。次節以降では、この研究構想を具現化するアプローチとして、現象学的アプローチを検討する。

4. 現象学的アプローチの可能性 (I) —A. シュッツの社会学理論

本節と次節では、前節で検討した課題を乗り越える現象学的アプローチの可能性を検討する。本稿は同性愛者のアイデンティティ研究に必要な現象学的アプローチを具体化するには、理論としてはA. シュッツの社会学理論、研究方法としてはライフストーリー研究法が有用であることを明らかにする。前者については本節で論じ、後者については次節で論じる。

現象学におけるシュッツの議論の特異性は、社会科学の方法論の再構成にある。シュッツはE. フッサールの現象学の影響を受けながら、日常生活を送る行為者の主観的意味世界に

⁴ この指摘は、同性愛研究とは異なる研究テーマのレビューを通じて、ある対象をめぐる研究知見の政治的有効性をめぐる二元論／二項対立的議論よりも、その議論に先立つ対象の実態や個別的な経験をめぐる詳細な分析こそが重要であるという議論（西倉 2005; 赤川 2006）の影響を受けている。

もとづいた概念構成の基準を提示した。シュッツの問題意識について高艸賢は、「一方で認識の論理学をめざす新カント派は科学的概念構成のみに焦点化し前科学的領域を無視した議論を展開しており、他方で体験の直感的理解という方法に依拠するディルタイは社会科学が概念的な営みであることを見落としていた」(高艸 2016: 160)と整理している。シュッツの射程は、生活世界という前科学的な領域を扱う社会科学が生きられた経験のリアリティを見失わないための理論化を構想することにあつた。

シュッツは行為者の主観の重要性を主張するために、M. ウェーバーの理解社会学を再構成する。ウェーバーは「社会的行為を解釈によって理解するという方法で社会的行為の過程および結果を因果的に説明しようとする科学」(Weber 1921=1972: 8)として理解社会学を定式化した。ウェーバーの理解社会学にしたがえば、観察者は行為者の意味をその外的経過から理解することが可能である。しかしシュッツは、外的経過の直接観察だけでは行為者の意味を把握することはできないと批判し、研究者は「行為者がその行為に結びつけている主観的意味」(Schütz [1932]1974=2006: 53)に迫る必要があると指摘する。行為者の主観的意味連関に研究者が迫ることで、理解社会学は行為者の主観や意味を取り逃さない客観的な行為者モデルを構築できるとシュッツは考えた(高艸 2017: 63)。

行為者の主観的意味連関に迫る必要性をシュッツが提起したのは、社会科学の科学としての固有性に由来する。シュッツによれば、社会学者が観察対象とする行為者は、社会的世界を「日常生活の現実についての一連の常識的な概念構成によって、社会学者に先立ってあらかじめ選定し、解釈している」(Schutz 1962=1983: 52)。社会学者の構成する概念は、行為者によってあらかじめ解釈された構成概念にもとづく二次的な構成概念なのである。このことを踏まえれば、社会学者の思惟対象は、「人びとが日常生活のなかで社会的現実に対処するために構成する常識の思惟対象と、一貫したものであり続けなければならない」(Schutz 1962=1983: 97)。研究者の既存の枠組みをただ当てはめて行為者を解釈するのではなく、行為者の日常生活における概念構成にもとづいて社会学者が概念構成を作成し、行為者の意味世界を解明するための理論をシュッツは構築したといえる。

シュッツの提唱する社会学理論は、前節で指摘した同性愛者のアイデンティティ研究における課題を乗り越える研究構想に、理論的示唆を与える。同性愛者のアイデンティティは、どのような政治的効果をもつのかをめぐって研究者たちによって議論されてきた。しかし、アイデンティティに同性愛者個々人が研究者に先立って付与している主観的意味がどのようなものであるのかについては、詳細に問われてこなかった。そのため、研究者が政治的効果を見出したアイデンティティは、生活世界における同性愛者個々人の意味づけを取りこぼしてきたといえる。

この課題を乗り越えるために、生活世界における同性愛者個々人の意味づけから出発するのが現象学的アプローチである。「主観的観点を守ることは、社会的現実の世界が科学的観察者の構成した実在していない虚構の世界に置き換えられることを防ぐ唯一の、そして十分な保証なのである」(Schutz 1964=1991: 26)。本節で検討したシュッツの社会学理論を踏

まえば、研究者の構成した同性愛者のアイデンティティ理解には還元されない、生活世界を生きる個々人のアイデンティティの主観的意識に迫り、それもとづいてアイデンティティ概念を再構成するアプローチ、西村ユミの言葉を借りれば「先行理解を更新させることにおいて、経験を理解（＝解釈）しようとする方法」（西村 2019: 189）が導出される。

5. 現象学的アプローチの可能性（II）——ライフストーリー研究法

ここまで、現象学的アプローチの理論的枠組みを支えるシュッツの社会学理論について検討してきた。シュッツの社会学理論を採用する現象学的アプローチは、どのような研究方法と接続可能であるのだろうか。現象学的視座にもとづき集められた「当事者の経験をどのように記述していくのか」という問いは、今後の現象学・社会科学会の中で議論され続けていく課題だろう」と稲原美苗（2018: 40）が指摘するように、現象学的アプローチの具体的な研究方法については、いまだ十分な議論が蓄積されていない。そのようななか、桜井厚の提唱するライフストーリー研究法は、現象学的アプローチにもとづく研究方法として注目されている（白井 2018; 岩崎 2018）。このことを踏まえ本節は、ライフストーリー研究法を現象学的アプローチにもとづく研究方法として導入できることを明らかにする。

ライフストーリー研究法はさまざまな立場や方法を包含するが、桜井厚が『インタビューの社会学』（桜井 2002）において提唱した「対話的構築主義アプローチ」にもとづくインタビューの分析手法がよく知られている。桜井は「対話的構築主義アプローチ」を構想することで、ライフヒストリー研究を批判的に継承した。ライフヒストリーは実証主義にもとづき、語りを客観的な出来事を刻印した事実とみなしてきたのに対して、ライフストーリーは語りを「語り手とインタビュアーとの相互行為を通じて構築されるもの」（桜井 2002: 28）とみなす。また、ライフヒストリーは語りを当時の公文書や資料を参照して補強することを試みる一方、ライフストーリーは個々人の意味世界における語りの内的一貫性に主眼を置く（桜井 2002: 201-9）。桜井はライフヒストリー研究を問い直す立場から、行為者の主観に迫るライフストーリー研究法を構想した。

桜井の提唱するライフストーリー研究法については、シュッツの社会学理論の影響が指摘されている（関水 2019）。桜井によれば、反省的態度と自然的態度の混合した意識形態においてライフストーリーが語られることから、ライフストーリーはシュッツのいう日常的知識の特徴に合致するという（桜井 2002: 236-7）。また、ライフストーリーを聞くことを通じて研究者は、先行する調査対象者の理解を「『生きられた』生ないしは経験されたものとしての『社会的現実』（関水 2019: 293）に即したものに更新しようとする。実際ライフストーリー研究は、研究者の既存の枠組みが調査対象者の主観的観点と食い違う場合、研究者の枠組みを変更して行為者の主観的観点に近づこうとする（西倉 2009; 湯川 2014）。こうした姿勢には、前節で検討したシュッツの議論の影響がみられる。シュッツの社会学理論とライフストーリー研究法は、研究の理論と方法として統合可能である（近藤 2018）。

ライフストーリー研究法が語りのなかで特に注目するのは、研究参加者の個別的な語りである。桜井によれば、語りには支配的文化の保持するマスター・ナラティブ（ドミナント・ストーリー）やそれに同調したり対抗したりするコミュニティのモデル・ストーリーがある。しかし、そうした支配的なストーリーに対する違和感や嘲笑が調査の際に語られることがある。これを桜井（2002:288）は「自分の個別的なストーリーをそうしたストーリーへ回収されまいとする語り手の〈個別化＝主体化〉の実践」とみなし、それを「新しいストーリー生成の契機になる潜勢力」とみる。こうした議論からは、自身の経験の固有性を提示しようとする研究参加者の主体性に着目するのがライフストーリー研究法であることが分かる。

〈個別化＝主体化〉の契機は、同性愛者のアイデンティティをめぐるリアリティに迫る際に重要な示唆を与える。志木令子は、同性愛者のセクシュアリティを「構図としてのセクシュアリティ」と「個人のセクシュアリティ」の二つに分ける興味深い議論を展開している（志木 1996）。「構図としてのセクシュアリティ」は「社会一般の中で客観的な色分けを可能とする（区別する）ためのセクシュアリティ」（志木 1996: 46）であるため、個人のセクシュアリティを集約的に表現するものではない。一方で「個人のセクシュアリティ」は、「個人の絶対的価値判断に基づいたセクシュアリティ」を指す（志木 1996: 46）。この区別を通じて志木は、これまで社会的に語られてきた同性愛者のセクシュアリティは「構図としてのセクシュアリティ」であったとし、それには還元されない「個人のセクシュアリティ」から個々人のセクシュアリティをめぐる主観的理解に目を向ける必要性を提起する。

志木の問題意識は、3節で示した同性愛者のアイデンティティ研究の課題と接続可能である。従来の同性愛研究は政治的効果主導で議論を行ってきたため、同性愛者個々人のアイデンティティをめぐる主観的解釈を取りこぼしてきた。志木の言葉を借りれば、同性愛者の「主観的な（再定義を経た）〔アイデンティティに関する：引用者注〕言葉の受け入れ」（志木 1996: 39）の側面が見落とされてきたといえる。同性愛者のアイデンティティに関する先行理解を同性愛者個々人はどのように理解し、個人的アイデンティティを形成してきたのか。〈個別化＝主体化〉の実践に着目するライフストーリー研究法は、これまで研究者の措定してきたアイデンティティ像や社会的に流通するアイデンティティ理解には還元されない個別性から出発し、当事者の実態に即して同性愛者のアイデンティティ理解を再構成する研究方法である。

このようにライフストーリー研究法は、シュッツの社会学理論に根ざしながら、行為者の主観的意味世界を描き出し、研究者の枠組みを再構成する研究を志向する。ライフストーリー研究法の主眼は、日常世界における行為者の主観的意味に焦点化することで、研究者がこれまで自明視してきた枠組みを相対化し、当事者の生きられた経験を理論化することにある。同性愛者個々人のアイデンティティをめぐる意識を分析することで、同性愛者のアイデンティティに関する先行理解には還元されない同性愛者個々人のアイデンティティへの意識を浮かび上がらせ、研究者の措定するアイデンティティを当事者個々人の社会的現実にもとづいて再構成する。ライフストーリー研究法にもとづく同性愛者のアイデンティティ

研究は、こうした新たな研究の方向性をもつ。

6. 結語

本稿が明らかにしたことは、以下三点ある。第一に、日本における同性愛研究者の見解は、アイデンティティの被構築性を議論の前提として、アイデンティティ・ポリティクスに異性愛規範やホモフォビアを乗り越える政治的効果を見出すか否かで対立してきた（2節）。第二に、政治的効果に焦点化してきた同性愛者のアイデンティティ研究は、研究者によって措定されてきたアイデンティティ理解に先立つ同性愛者個々人の意識を十分に検討してこなかった（3節）。第三に、その課題を乗り越えるためには、シュッツの社会学理論とライフストーリー研究法にもとづく現象学的アプローチが有効である（4節、5節）。

本稿が提唱するに至った現象学的アプローチにもとづく同性愛者のアイデンティティ研究を一言でまとめれば、研究者によって議論されてきた政治的アイデンティティではなく、生活世界における同性愛者個々人の意識にある個別的アイデンティティに迫り、そのアイデンティティの意味を解釈することで既存のアイデンティティ理解を再構成するという方途である。この現象学的アプローチは、同性愛者のアイデンティティに限定されず、他の対象を研究する際のアプローチにも応用可能性があると考えられる（cf. 近藤 2018）。本稿は現象学的アプローチを定式化する試みの一つであり、本稿をきっかけに現象学的アプローチの可能性についてさらなる議論が進展すれば幸いである。

最後に、本稿の限界と今後の課題について述べたい。まず、本稿の提起した現象学的アプローチを具体的な研究として実現する際には、さまざまな課題が浮上すると思われる。研究対象の設定やインタビュー調査の進め方、分析方針の決定など、具体的に調査を進めていくなかでこうした問題に直面した際に、現象学的アプローチにもとづく同性愛者のアイデンティティ研究をいかに構成していくのか。こうした具体的な課題への対処法は今後の課題であり、実際の調査の実施と分析を行うなかで取り組んでいく必要がある。また、現象学的アプローチにもとづく研究が政治的アイデンティティの可能性を模索する既存の議論といかに接続可能かについては、十分に論じられなかった。現象学的アプローチにもとづく研究知見が政治的効果を持ちうるのかについても、今後具体的な研究を積み重ねていくなかで、検討を行っていききたい。

謝辞

本稿は、JST 及び名古屋大学による名古屋大学融合フロンティアフェローシップの支援を受けたものです。この場を借りて御礼申し上げます。

文献

- 赤川学、2006、「性差をどう考えるか：本質主義／構築主義論争の不毛をこえて」、『大航海』第五七号、122-33.
- Butler, Judith, [1991]1993, "Imitation and Gender Insubordination," in Henry Abelove, Michèle A. Barale and David M. Halperin eds., *The Lesbian and Gay Studies Reader*, New York and London: Routledge, 307-20. (杉浦悦子訳、1996、「模倣とジェンダーへの抵抗」、『imago』第七卷六号、116-35) .
- Boswell, John, 1992, "Concepts, Experience, and Sexuality," in Edward Stein ed., *Forms of Desire*, New York and London: Routledge, 133-73.
- Edelman, Lee, 1994, "The Mirror and the Tank: "AIDS," Subjectivity, and the Rhetoric of Activism," in *Homographesis: Essays in Gay Literary and Cultural Theory*, New York: Routledge, 93-117. (ヴィンセント／キース・北丸雄二訳、1997、「鏡と戦車：「エイズ」、主体性、そしてアクティヴィズムの修辞学」、『現代思想』第二五卷六号、257-85) .
- Epstein, 1987, "Gay Politics, Ethnic Identity: The Limits of Social Constructionism," *Socialist Review*, 93, 9-54.
- 江原由美子、[1985]2021、『増補 女性解放という思想』筑摩書房.
- Halwani, Raja, 1998, "Essentialism, Social Constructionism, and the History of Homosexuality," *Journal of Homosexuality*, 35(1), 25-51.
- , 2006, "Prolegomena to Any Future Metaphysics of Sexual Identity," in Linda Martin Alcoff et al. eds., *Identity Politics Reconsidered*, New York: Haworth Press, 209-27.
- 堀江有里、2006、『「レズビアン」という生き方：キリスト教の異性愛主義を問う』新教出版社.
- , 2015、『レズビアン・アイデンティティーズ』洛北出版.
- 飯野由里子、2008、『レズビアンである〈わたしたち〉のストーリー』生活書院.
- 稲原美苗、2018、「当事者とともに：現象学的質的研究の可能性を考える」、『現象学と社会科学』第一号、31-48.
- 伊野真一、2005、「脱アイデンティティの政治」、上野千鶴子編著『脱アイデンティティ』勁草書房、43-76.
- 石井香里、2009、「レズビアンのパッシング実践の可能性について」、『女性学年報』第三〇号、65-83.
- 岩崎久志、2018、「現象学的アプローチにおけるインタビューの検討：ライフストーリー研究を参照にして」、『流通科学大学論集：人間・社会・自然編』第三〇巻二号、87-101.
- 金田智之、2003、「「カミングアウト」の選択性をめぐるとの問題について」、『社会学論考』第二四号、61-81.
- 河口和也、1997、「懸命にゲイになること：主体・抵抗・生の様式」、『現代思想』第二五卷三号、186-94.
- 川坂和義、2008、「「カミングアウト」の困難」、『Gender and Sexuality』第三号、59-75.
- , 2021、「日本のゲイ・スタディーズにおける「当事者」受容：エイズ危機から日本のホモノーマティヴィティへ」、榎田美緒・小川伸彦編著『〈当事者宣言〉の社会学：言葉とカテゴリー』東信堂、121-45.
- 風間孝、1997、「クィアはどこからきたか：クィア・セオリーにおける理論と実践」、『別冊 id 研』動くゲイとレズビアンの会、10-35.

- 、1999、「公的領域と私的領域という陥穽：府中青年の家裁判の分析」、『解放社会学研究』第一三
号、3-26.
- 、2002、「カミングアウトのポリティクス」、『社会学評論』第五三卷三号、348-64.
- 風間孝・河口和也、2010、『同性愛と異性愛』岩波書店.
- 近藤菜月、2018、「途上国の社会運動を行為者の視点から捉える理論・分析枠組み：ライフストーリーによ
る行為の意味への接近」、『国際開発研究フォーラム』第四八巻四号、1-16.
- 西倉実季、2005、「「美」を論じるフェミニズムの課題：二元論的思考を超えて」、『F-GENS Journal』第四号、
61-7.
- 、2009、『顔にあざのある女性たち：「問題経験の語り」の社会学』生活書院.
- 西村ユミ、2019、「解釈的現象学」、サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実編著『質的研究法マッピング：特徴
をつかみ、活用するために』新曜社、189-96.
- 大坪真利子、2019、「「個人の選択」としてのカミングアウトという困難」、『解放社会学研究』第三三三号、7-
23.
- 桜井厚、2002、『インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- Schütz, Alfred, [1932]1974, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: Eine Einleitung in die verstehende Soziologie*,
Wien: Springer-Verlag. (佐藤嘉一訳、2006、『社会的世界の意味構成：理解社会学入門〔改訳版〕』木
鐸社).
- Schutz, Alfred, 1962, *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, The Hague: Martinus Nijhoff. (渡辺光・那
須壽・西原和久訳、1983、『アルフレッド・シュッツ著作集 第1巻：社会的現実の問題I』マルジ
ュ社).
- , 1964, *Collected Papers II: Studies in Social Theory*, The Hague: Martinus Nijhoff. (渡辺光・那須壽・西
原和久訳、1991、『アルフレッド・シュッツ著作集 第3巻：社会理論の研究』マルジュ社).
- 白井千晶、2018、「「打ち明ける」：リプロダクションの構築主義的ライフストーリー・インタビュー」、『現
象学と社会科学』第一号、21-30.
- 関水徹平、2019、「ライフストーリー研究と複数の事実性：学知と日常知を問い直す方法論としての可能性」、
栗原亘・関水徹平・大黒屋貴稔編著『知の社会学の可能性』学文社、287-306.
- 志木令子、1996、「レズビアン、バイセクシュアル女性の「セクシュアリティ」、クィア・スタディーズ編
集委員会編『クィア・スタディーズ'96：クィア・ジェネレーションの誕生』七つ森書館、36-49.
- 清水晶子、2006、「キリンのサバイバルのために：ジュディス・バトラーとアイデンティティ・ポリティク
ス再考」、『現代思想』第三四巻一、二号、171-87.
- 高橋慎一、2008、「〈わたしたち〉の集合性はいかにして擁護できるのか？：飯野由里子『レズビアンである
〈わたしたち〉のストーリー』と集合性への違和感」、『叢書クィア』第一号、190-9.
- 高艸賢、2016、「体験と認識のはざままで：初期草稿におけるシュッツの問題関心と意味生成」、『ソシオロギ
ス』第四〇号、156-72.
- 、2017、「シュッツの社会科学基礎論における生の諸相：体験次元と意味次元の統一としての主観
的意味」、『現代社会学理論研究』第一一、二号、55-67.

- 竹村和子、[2001]2013、「「資本主義はもはや異性愛主義を必要としていない」のか：「同一性の原理」をめぐってバトラーとフレイザーが言わなかったこと」、『境界を攪乱する』岩波書店、3-44.
- 、[2002]2021、『愛について：アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店.
- 武内今日子、2022、「「性的指向」をめぐるカテゴリー化と個別的な性：一九九〇年代における性的少数者のミニコミ誌の分析を中心に」、『ソシオロジ』第六六巻三号、21-39.
- 魚住洋一、2011、「ホモセクシュアリティをめぐって：「社会構築主義・本質主義論争」の一側面」、『倫理学研究』第四一号、137-48.
- ヴィンセント／キース・風間孝・河口和也、1997、『ゲイ・スタディーズ』青土社.
- Weber, Max, 1922, “Soziologische Grundbegriffe,” in *Wirtschaft und Gesellschaft*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1-30. (清水幾太郎訳、1972、『社会学の根本概念』岩波書店).
- 湯川やよい、2014、『アカデミック・ハラスメントの社会学：学生の問題経験と「領域交差」実践』ハーベスタ社.

(しまぶくろ かいり・名古屋大学大学院)